

2009年夏中国・旧満州の旅

名井 佳子

2009年の夏、たまたま4大学5人の先生方の企画「中国・旧満州調査の旅」に誘われました。日程表を見ると初日に731部隊遺跡となっていたので、ハルピンまで行くのなら是非方正地区日本人公墓へも行って欲しいと頼みました。4泊5日という短期の旅の中に、ハルピンから相当距離のある方正までの無理な願いでしたが幸い快く受け入れて頂きました。

爽やかな風が

当日朝7時30分ハルピンを出発、きれいに整備された高速道路で方正へ向いました。道路の両側はトウモロコシ畑が延々続きます。3時間余りで目的地の中日友好園林に到着すると、方正県人民政府外事僑務弁公室副主任の李さんら3人が待っていてくれて入口を開けてくれました。(その都度、お役所に届けなければ自由に墓参は出来ないようです。)

まず案内されたのはこれまで何度も写真で見たことのある方正地区日本人公墓でした。夏なのに背の高い赤松に囲まれ爽やかな風が吹き抜ける墓地でした。隣に並んでいる麻山地区日本人公墓とともに花束をお供えし、墓前に立ちました。手を合わせると心中にいろいろな想いがめぐりました。(今立っているこの場所に、敗戦直後奥地から自力で逃げても逃げても逃げ切れず命を落とした5000人もの人々が、また隣の麻山地区日本人公墓には鶏西市麻山地区から運ばれてきた集団自決を余儀なくされた500余名の遺骨がねむっているのだ。どの方々もどれほど祖国へ帰りたいかたことでしょう。どうか気持ちを静め安らかにお眠りくださいますように。)

墓前を次の人に譲って墓地の端に立ち、並んでいる二つの公墓を見つめているとまた想いがめぐって来た。(本当によくぞ当時の残虐な敵国であった日本人の遺骨をまとめて公墓を作って下さった事だ。地元の人々には反対意見の人も少なくなかったと思うが、この申請が最高指導者のもとまで無事に届いた事も不思議であり、周恩来総理の冷静で両国或いは人としてのあり方を示された寛大な決断にも大きく感じ入り頭が下がる。21世紀を迎えた今の世界でもまだまだ戦争の続いている国がある。どこの国に周恩来総理ほどの相手国への勇気ある決断で自国の人々を納得させる指導者がいるだろうか。戦後どれだけの時が流れてもこの方正県の日本人公墓を訪れることが出来た日本人は全て、心からの驚きと感謝の気持ちで一杯になるはずだ。)

次に少し歩いて中国養父母公墓に案内された。こちらは日本人公墓に比べ背の高い木が少ないせいか明るかった。同じく花束を供えて心から養父母への感謝の気持ちでお参りさせていただいた。(この公墓は残留孤児でも早めに帰国し、日本で仕事に成功

した人が中国の養父母への感謝の気持ちで作ったのだとか。感謝の気持ちを実行に移され良い事をして下さった。中国での育ちの環境はそれぞれだが、放り出された敵国の子ども達を引き取り育ててくれた養父母の尊い心根に深く感謝。）

その次に東北地方の農業に偉大な貢献を果たした藤原長作さんの記念碑の所へ移動。（この話は日本でもよく知られていると思う。水稻栽培の優れた技術を中国東北地方の人々に伝え大きく貢献された事は日本人としてとても嬉しい。）

ところで、こうして公墓や記念碑を巡っている間、傍に居ながら何故かニコリともしないお役人とは対照的に優しそうな顔をした人が居たので、よく見ると管理員の張林さんと分った。思わず声を掛け、行き届いた管理をしてくれている事に感謝の言葉と、もしお会いできたらと用意してきたお土産をそっと手渡した。

このあときれいな花畑にはさまれた記念陳列館に入る。壁には色々な事柄の説明が中国語と日本語で貼られていたが、思ったより展示物は少なかった。しかし、この陳列館は近いうちに改装されるとのこと、今後はどの様になるのだろうか。

この陳列館を出ると大体一巡できたので、我らの代表者が李さんにお礼としてお土産を手渡すと初めてお役人から笑顔が見えた。それから又ほかの記念碑や桜の木など次々植えられている樹木を見て回り、十分に時を過ごした後、中日友好園林の門を出る。

今回の旅は、時間の余裕があまり無いので方正の町でゆっくり過ごす事は出来ず、そのまま次の目的地731部隊遺跡へと出発した。

人間の崇高と狂気

ハルピンに行く機会があれば近郊の平房にある731部隊遺跡には必ず行くといい。

中国侵略日本軍第731部隊罪証陳列館に入ると、戦争がどれほど人の考えを狂わせるか。当時軍部大本營の命令とはいえ、本当に同じ日本人のやった事なのか俄かには信じられない事実がしっかり展示されている。細菌学に優れた能力があった医師。戦争でなければ日本医学の進歩に大きく力を発揮出来ただろうに、現実には軍部への貢献のため細菌兵器の開発と細菌戦を進めた。多くの生きている同じ人間に、恐ろしい生体実験を繰り返すなど、平和な時代の人間では考えられない行動を敗戦までやり続けた。（この部隊の人々はもうすっかり狂った人間になってしまっている。）

この一日で人間の両極端な行為事実を目にし、夜は疲れていたのに心が落ち着かずなかなか眠りにつけなかった。次の日から偽満皇宮博物院、偽満州国務院、平頂山惨案遺址記念館、撫順戦犯管理所、九・一八歴史博物館、張氏帥府博物館など広い東北地区を駆け足で巡った。この旅は短期ではあったが非常に重く辛い時間だった。しかし、今回得た知識は学生時代ざっと終えた近代史の時間や、本を読んで分ったつもりでいた日中戦争の知識とは雲泥の差。戦争の恐ろしさが実感できた。

旧満州の各遺跡や記念館めぐりは決して楽しい観光旅行とはいえないが、負の現実確認が出来る貴重な旅先。日本人として一度は出掛けた方がいいと思う。

*

「健康増進教室」について

千葉県は地理的環境に恵まれているせいか、当時満蒙開拓団として中国・東北地方に渡った人は少なかったようだ。敗戦後、時が流れようやく日本での残留孤児肉親探しが始まると、時を追うごとに千葉にやってくる帰国者の数が増加してきた。彼らはやっとの思いで帰国したのに、言葉や生活習慣の壁が厚く、なかなか祖国の生活に馴染めないでいる。そんな人々が身近に増えてきた 1990 年に、「中国帰国家族を支援する会」の活動が始まった。活動を続けて今年はまだ 20 年目になる。支える仲間は各分野で今も努力を続けている。2005 年夏から始めた「健康増進教室」もその 1 つ。残留孤児の人々は振り返れば、それぞれに厳しかった体験を思い出すだろうがそれはそれとして、現に生きている今の貴重な時間をどう過ごしていくかが大きな問題。高齢化が進む今では何より心身ともに健康である日が一日も長く続くことが大切と活動を始めた。

毎週土曜日朝から昼までの 3 時間。病院で使う日語学習、楽しく知識を広める日語学習、健康維持のための太極拳、近所の盆踊りに参加できるよう盆踊り、自分達の好きな中国の歌、季節ごとの日本の唱歌や童謡の練習。また、バスで県内の様々な施設見学や各シーズンに合わせた行事を実施している。スタートの頃に比べ倍以上に参加者が増えそれぞれの表情が明るくなった事が何よりやりがいを感じ嬉しい事だ。

(ない・よしこ：90 年、千葉に帰国した残留孤児の 2 世たち(小、中学生)への補習とストレス解消を支援する「土曜学級」を開設。05 年、高齢化の進んだ帰国者のために開設された「健康増進教室」活動に参加。「中国帰国家族を支援する会」理事)